

ルポ

コロナ後遺症

上

2021年1月16日 記者

記者も診察を受け「そのまま

休職。時短勤務などを含める

ルーツの皮をむいたばかり

(33歳、女性)は新型コロナウイルス感染症の陽性と判明した。症状は軽いままで、2月には職場復帰した。ただ、復帰初日に倦怠感に悩まされ

までは寝たきりになる。絶対安静」と言われ、休職した。

仕事を持つ、同クリニックを訪れた1832人(昨年12月18日時点)のうち36人が

でたどり、

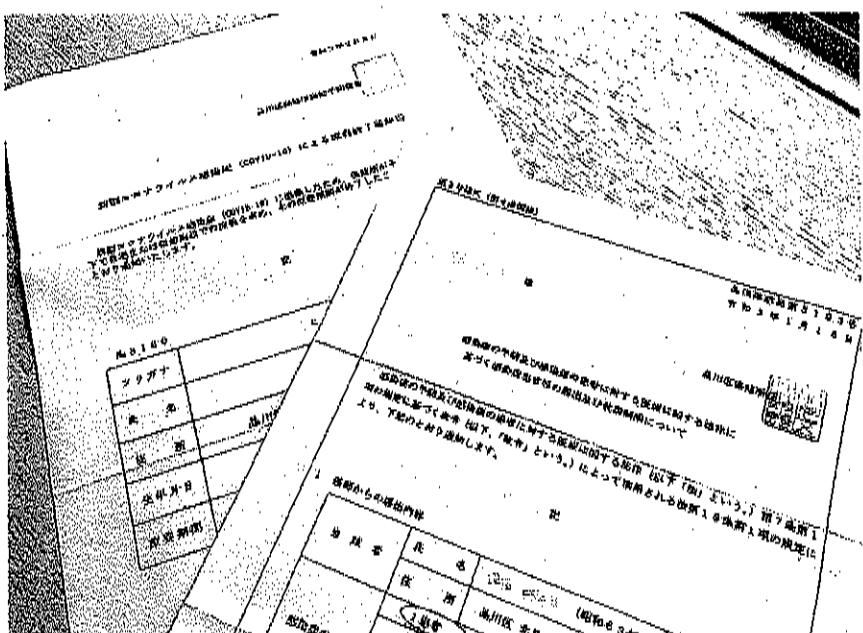
強い炎症が起きたことによる不快感が襲い、呼吸もままならない。床でのたうち回りながら、近くにあった家電のコードが目に入った。このまま死んでしまった方が楽かもしれない。そんな衝動は生まれない。そんな衝動は生まれて初めてだった。

激痛、不快、のたうち回る

た。徹夜明けのような疲労感と、平熱なのに高熱時のようなぼり。立っているだけでつらく、職場のソファに頻繁に倒れ込む。しばらく休むと消えるため、そのうち治ると思っていた。

しかし、その後も治らない。4月下旬、倦怠感が急激に強くなり、起き上がるのも困難になり、再感染を疑つてPCR検査を受けたが陰性だった。上班族などに強い痛みを感じる。痛くて座つていられない。

コロナの後遺症に詳しいヒラハタクリニック(東京)の平畠光一医師によると、悪化して筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群(ME/CFS)に移行し、寝たきりになるケースもある。



記者が新型コロナウイルス感染後、東京都品川区から届いた就業制限に関する文書(画像の一部をモザイク加工しています)

陽性、軽症—復帰も休職

コロナに感染した記者は後遺症に苦しみ、休職した。治療である程度は改善したが、1年後の今も不調が続く。いつぶり返すかという恐怖感も強化していくからと油断しないでほしい。後遺症は若者にも多い。記者の経験から、その深刻さを知つてもらいたい。

× × × ×

コロナに感染した記者は後遺症に苦しみ、休職した。治療である程度は改善したが、1年後の今も不調が続く。いつぶり返すかという恐怖感も強化していくからと油断しないでほしい。後遺症は若者にも多い。記者の経験から、その深刻さを知つてもらいたい。